

群 教 セ	E03 - 03
	平17.231集

「ほっとルーム」を拠点とした 地域ネットワーク支援の充実を目指して

——学校支援隊と子育て支援セミナーの活用を通して——

特別研修員 村上 一美 (館林市立第六小学校)

《 研究の概要 》

本研究では、「ほっとルーム」を地域ネットワーク支援の拠点として、「学習支援の場」「子育て支援の場」という2つの機能をもたせ活用した。学習支援の場では、保護者や地域の退職教員を学習支援隊とし、放課後の学習支援を通して、児童との心の交流を行った。子育て支援の場では、子育てに悩む保護者に対して「子育て支援セミナー」を実施した。この2つの機能の活用を通して、学校と地域が協力し合いながら支援の充実を目指した。

キーワード 【教育相談 ほっとルーム 地域ネットワーク 学習支援 子育て支援セミナー】

I 主題設定の理由

本校は現在（平成17年6月現在）、不登校児童はいないが、登校を渋りがちな児童や遅刻が多い児童、欠席が多い児童は数名いる。今後児童が不登校にならないための学校づくりや不登校の予防に取り組むことは大切なことである。

本校の児童は、学力差が大きく、基礎的・基本的な学習内容が定着していないものがある。これは、学校評価の結果からも家庭学習の定着が図られていないということが原因であると考えられる。また、忘れ物が多い、提出物が期日までに集まらないということもある。これらは、家庭の教育力の低下が否めないのではないかと考える。そこで、校内研修とも関係する「家庭学習の手引」を各家庭に配布したり、学年だより等で呼びかけたりして家庭への協力を促してきた。

これまで本校では、問題行動を起こす児童に対しては、担任だけが対応して、抱え込んでしまうことが多かった。月一回の情報交換の場はあっても、なかなか職員一丸となって手だてを講じるということが少なかった。昨年度設置した「ほっとルーム」は児童への教育相談の場としての活用であったが、今年度はさらに違う側面からの活用を図っていきたく考えた。そこで、職員全体で共通理解を図り、お互いに協力し合い、学校組織が一丸となって児童を育てていくために、全職員に「ほっとルーム」の活用についてアンケートを実施した。その結果、職員は基礎的・基本的な学力の定着を図りたいと考えていることが分かった。

本校には、5年前から読み聞かせやクラブ活動、様々な学校行事などで「学校ボランティア」として活動している保護者や地域の方がいる。今年度、今までの「学校ボランティア」を改め、「学校支援隊」と命名し、学校支援センター（「ほっとルーム」にて）を立ち上げた。本校の課題を解決するために、現在の学校支援隊の輪を広げ、学校と地域が協力し合い、支援していくネットワーク（ほっとルームを拠点として）が、重要であると考えられる。そのネットワークによる支援が有効に機能していけば、児童が楽しく安心して通える学校づくりになっていくと考える。

また、保護者の中には、子どもへのしかり方・接し方など子育てに関する悩みをもっていると思われるので、「子育て支援セミナー」の実践を通して、子どもとのかかわり方について支援していきたいと考える。

以上のことから、「ほっとルーム」を学習支援の場・子育て支援の場と位置づけ、支援していく体制を充実させていけば、不登校予防になると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

ほっとルームに「学習支援の場」「子育て支援の場」という2つの機能をもたせ、地域ネットワーク（心の交流のネットワーク）支援を充実させることが、不登校予防につながると考え、児童が楽しく安心して学校生活を送れるようになることをねらいとする。

Ⅲ 研究の見通し

1 「学習支援の場」

学習支援を通して、保護者は児童とのかかわり方を学び、自分の子育てを振り返り、家庭での子どもとのかかわり方に目を向けることができるであろう。それがすなわち、子どもとの心の交流を図ることになるであろう。

地域の人は、児童に接することにより、学校の様子がよく分かり、身近なものと感じ、学校教育に理解を示すとともに、児童との心の交流も生まれてくるであろう。

児童は、親ではない大人との触れ合いを通して、愛情や温かさ、優しさを感じ取ることができ、大

人との交流が図れるであろう。

2 「子育て支援の場」

「子育て支援セミナー」を実施することが、子育てに悩んだり不安に思ったりしている保護者への支援になるとともに、学校と保護者との信頼関係が深まり、その結果、児童が安心して学校生活を送ることができるであろう。

つまり、「学習支援」「子育て支援セミナー」が児童・学校・地域の心の交流のネットワークの基盤となり、学校・地域の連携を図っていくことが、不登校予防になるとともに、児童が安心して楽しい学校生活を送れることになると考える。

Ⅲ 研究計画

月	学 習 支 援	子 育 て 支 援
5	・「ほっとルーム」についてのアンケート実施（教職員対象）	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価による家庭教育に関する調査 ・調査のまとめ、課題の集約、職員の共通理解 ・子育て支援セミナー実施に向けた計画立案、準備
7	・学習支援隊の募集	
8	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援隊の保護者のリストアップ ・上記保護者への「協力のお願い」の手紙の配布 	
9	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援隊との会議（9/2） ・学習支援の開始（9/7 低学年） ・学習支援日《7・9・21・2・30》 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援セミナーについてのアンケート実施（保護者対象） ・子育て支援セミナーのプログラム作成
10	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援隊との会議（学習支援後随時行うものとする） ・学習支援日《5・7・12・14・19・21・26》 	
11	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援日《2・4・7・9・11・25・30》 ・学習会に参加している児童、学習支援隊、保護者に対して学習会についてのアンケート実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援セミナーの実施(11/7) ・参加者の感想・意見の集約 ・リーフレットの作成
12	・アンケート結果をもとに、学習支援隊との話合い	・「子育て支援セミナーだより」として全家庭にリーフレットを配布
1	・学習支援日《13・18・20・25・27》	<ul style="list-style-type: none"> ・リーフレット配布後の保護者への聞き取り調査 ・学校評価の項目への位置づけ ・次年度に向けた計画立案
2	・学習支援日《1・3・8・10・15・17・22・24》	
3	・学習支援日《1・3・8・10》	

IV 研究の内容

1 実践の内容

(1) 学習支援を通じた心の交流について

(ア) なぜ学習支援なのか

「ほっとルーム」事業を進める上で、本校職員がどのような課題をもち、どんなことに取り組みたいかということアンケート調査した。その結果、学力差が大きい、基礎的・基本的な学力を定着させたいという意見が多かった。そこで、全職員の協力体制のもと放課後の学習会を行うことにした。本校の児童の実態から、指導者は、教員だけではなく、保護者や地域の人にも協力してもらい、温かい雰囲気の中で学習支援を行うことが望ましいと考えた。教員の希望も取り入れ、かつ児童との温かい心の交流を図りながら学習支援をしていくことが、ほっとルームを拠点とした地域ネットワーク(心の交流ネットワーク)支援の充実につながると考えた。

(イ) 学習支援隊の募集

はじめに、保護者を対象に支援隊の募集を行った。2回の募集で3名の協力者が得られた。参加する児童一人一人に温かい雰囲気の中で学習支援するには、支援隊の人数が少ないと考え、支援隊に適した人材(人柄、守秘義務を守ることができる、子どもに対する態度等)をピックアップし、依頼の手紙を配布したところ、5名の承諾を得られた。また、保護者を対象に募集するとともに、公民館にも募集要項を置かせてもらい、地域へ情宣したが、申し出る人はいなかった。さらに、教育委員会を通じて提供された退職者名簿から退職教員の中から学習支援隊を募ることにした。

(ウ) 学習会に参加する児童の希望調査

学習会に参加する児童は、下校の際の防犯上のことを考えて、「保護者の同意を得た児童」とした。また、担任からみて、家庭で保護者から温かく家庭学習を見守ってもらうことが困難な児童に学習会に参加するよう声かけをし、保護者から同意が得られた児童も対象にした。9月15日時点で、希望者は95名であった。

(エ) 学習支援隊会議

9月2日(金)午後3時よりほっとルームにて会議をもった。学校側は、校長、教育相談主任、教務主任の3名、学習支援隊の保護者は7名の参加であった。ほっとルームでなぜ学習支援を行うのか趣旨を説明し、児童の学力・家庭環境等につ

いては、守秘をお願いした。保護者からは、学習の進め方、指導の仕方など不安の声が聞かれた。

「この学習会は、学力向上が第一の目標ではないので、難しく考えないでください」と話した。

「子どもたちが『分かった。楽しかった』と言って帰ることができるようにがんばります」という保護者がいた。また、ある保護者からは、「他の子どもに接することで、自分の子どもに対する見方が変わるかな、と思って参加しました」という声が聞かれた。中学校で、学習ボランティアに参加したことがある保護者からは「子どもたちは、丁寧に丁寧に教えていくと必ず分かってくれる。優しく根気よく接してあげることが大切だと思う」という話があった。

(オ) 学習支援による心の交流

学習支援は、毎

週水曜日が低学年、金曜日が高学年とした。9月7日(水)午後3時より、1、2年生対象に学習支援(学習会)

を開始した。この日、3年生は芸術鑑賞教室のため参加しなかった。保護者による支援隊(お母さん先生と命名)は7名の参加。1年生に3名、2年生に4名のお母さん先生、教員2名で取り組んだ。学習後、子どもたちは「楽しかった」という感想をもって下校した。

学習支援後、お母さん先生たちは積極的に、次の進め方等について検討していた。「楽しかった」という感想をもってくれたことが、大変うれしくて次回への意欲につながったようである。様子を見てみると、お母さん先生たちは、子どもの目線に合わせて腰を下ろしていたり、優しく丁寧に説明したりしていた。このような接し方が子どもたちとの心の交流の原点になると考える。

9月9日(金)午後3時より高学年対象に行った。お母さん先生は6名の参加。4年生に3名、5、6年生に3名のお母さん先生、教員1名で取り組んだ。高学年の児童たちは、一人一人めあて

図1 学習支援隊会議の様子



図2 学習支援の様子(低)



をもって参加していた。分からないところがある
とすすんで挙手をして、お母さん先生に教えても
らう姿が見られた。

図3 学習支援の様子(高)



低学年の時と同
様に、お母さん
先生たちは、高
学年の児童の目
線に合わせていた。
優しい温かい雰

囲気で学習が進められていた。学習会後の反省会
では、低学年と違って、指導の難しさがあること
が話題になった。しかし、この学習会の趣旨を再
確認してもらった。

このように、心の交流に重点を置いた学習会を
週2回のペースで行っていった。

(カ) 支援隊募集の呼びかけ

9月8日(木)PTA本部・実行委員会で、支
援隊の募集を呼びかけた。児童の人数に比べて、
支援隊の人数が少なすぎ、子どもたち一人一人に
十分な対応ができないので、是非子どもたちのた
めにとお願いをした。今後も随時あらゆる手段を
講じて、子どもたちのために募集の呼びかけを行
っていくことにした。

PTA広報委員会から、「学習支援隊の募集の
記事を書きませんか？」という話があり、広報誌
に募集の呼びかけの記事を掲載した。

(キ) 「ほっとルームだより」の発行

毎月1回、「ほっとルームだより」を全家庭に
配布し、学習会での子どもたちの様子、お母さん
先生との様子などを知らせるようにした。読みや
すい内容と分量にすることにより、手軽に読んで
もらえるよう工夫した。

(ク) 支援隊協力者

学習会開始の10月の保護者による支援隊は7名
であったが、11月は6名となった。10月5日、12
日に、自分の子どもが学習会に参加している保護
者が2名、子どもの様子を見に来た。子どもが「学
習会楽しいよ」と言って帰ってくるので、どんな
様子で学習しているのか見に来た、ということだ
った。その2人の保護者からは、「とてもよい
雰囲気です学習をしていることが分かりました。こ
れからも、仕事の都合がついたときは、お手伝い
したいと思いました」という話を聞くことができ
た。

11月2日、地域の退職教員が学習支援隊に協力
してくださることになった。本校の子どもたちの

中には顔見知りの子とももいて、「習字の先生」
と親しまれている方である。今後さらに、退職教
員の支援隊の増員をめざしていくために、この退
職教員の参加はとても重要であると考えます。

(ケ) 学習会に参加している児童の感想

数回学習会を行った後、参加している児童に感
想を聞いてみた。学校の先生ではないお母さん先
生と学習して、どのような感想をもったか聞いた
結果が以下の通りである。

〈1年生〉

- ・わからないところをやさしくおしえてくれ
て、うれしかったです。それにとってもた
のしかったです。

〈2年生〉

- ・お母さん先生がおべんきょうを教えてくれ
て、やさしく見まもってくれてうれし
かったです。
- ・すごくやさしくしてくれてよかったです。
学校の先生よりすごくやさしいです。

〈3年生〉

- ・分からないところがあっても、お母さん先
生や先生に教えてもらい、楽しかったです。
パーフェクトのときは「○○ちゃん、パ
ーフェクト」とお母さん先生が言ってくれた
ことがうれしかったです。
- ・「どこがわからないの？」とやさしく言い
ながら教えてくれた。わたしのお母さんだ
ったら、わからないところは「自分で考え
なさい。」と言うと思う。

また、低学年には「自分の母親に、お母さん先
生になって、学習会に来てほしいと思うか」とい
うアンケートをとった。その結果、約72%の児童
が「自分の母親に来てほしい。一緒に勉強したい」
と思っていることが分かった。このことから、子
どもたちは、お母さん先生との触れ合いを通して
自分の母親との触れ合いを求めていることが分か
った。

〈4年生〉

- ・お母さん先生は、先生と違う感じがして勉
強しやすかった。
- ・いろいろな先生に勉強を覚えてもらうこと
ができて、楽しかった。

〈5年生〉

- ・お母さん先生は、よく教えてくれるし、ヒントもくれるのでいいと思います。
- ・まちがったとき、ていねいに教えてくれて、わかりやすかった。

〈6年生〉

- ・先生じゃないお母さん先生は、優しく教えてくれていいと思う。
- ・お母さん先生は、とても優しく教えてくれてとてもよかったです。

以上の児童の感想から分かるように、どの児童も優しいお母さん先生に教えてもらうことは、心が穏やかになり、それがうれしい、楽しいという気持ちにつながっているように思われる。

(㉑) 学習支援隊（保護者）の感想

学習支援隊として、毎回参加している保護者の方に、感想を聞いてみた。

- ・本当にいろいろな性格の子どもがいるなあと思い、先生方の苦労や大変さが少しだけわかり、私自身よい勉強になりました。
- ・少しずつ慣れてきて、子どもの性格？も分かかってきて、接し方も分かるようになってきたような気がします。
- ・今までは家庭で、「宿題やった？」「分からないところはないの？」というような声かけのみで終わっていたが、支援隊に参加するようになって、間違えてしまったところをもう一度一緒にやってみたり、ディスカッションをしてみたりと子どもとの会話が増えてきた。

(㉒) 10月に様子を見に来た保護者の感想

- ・子どもたちは、意外と楽しそうに問題に取り組んでいて驚きました。自分の子どもも含め、解き方が分からない子も少しアドバイスするとだんだんできるようになってきました。今回参加して教え方のポイントが分かり大変よかったですので、時折参加させていただきたいと思います。
- ・休みが取れたので、前から見てみたいと思っていたのと子どもが来てほしいと言ったので参加しました。少しでも手伝えるよう

代休など利用してまた参加したいと思います。「毎週ではなくても大丈夫です」ということを知らせてもらうことで私も参加しやすくなりました。

(㉓) 教員の感想

本校職員に対して、学習会をするようになってからクラスの児童にどのような変化が見られたか、学習会で指導をしたときの感想を聞いてみた。

- ・学習会によって低位群の児童の意欲に少しずつ変化が出てきた。
- ・自分の当番になっていないときでもできるだけ顔を出すようにしているが、支援隊の保護者の皆様が常に献身的に取り組んでくださることに頭が下がります。
- ・いろいろな先生に見てもらっているので、多面的にクラスの児童を見ることができる。
- ・学校の授業では、落ち着かない児童も学習会では、しっかりやっている姿が見られる。

(㉔) 地域在住退職教員の感想

2回の参加を通しての感想を聞いてみた。

- ・生徒指導面で大変な児童が多い。一人一人に目を向けるためには、教員のサポートがかなり必要だと思う。

(㉕) 支援隊に参加していない保護者の意識調査

子どもを学習会に参加させているが、支援隊に協力していない保護者に対して、「ほっとルームだより」「学校だより」「PTA広報誌」で再三協力を呼びかけてきた。「毎週でなくてもかまいません」「お子さんの様子を見に来られるだけでかまいません」と呼びかけたが、協力してくれた保護者は2名であった。なぜ協力できないのか、保護者への意識調査(アンケート)を行った。その結果、一番多い理由は「仕事をしているから」であった。その他の理由としては「下に小さい子どもがいるから」「時間がないから」が挙げられていた。やはり今の時代共働きの家庭が増えていることを再認識した。「下の子どもがいるから」と答えた保護者には、「小さいお子さんを連れてきてもかまいません」と知らせ、参加しやすい状況を作っていかなければならないと改めて思った。また、学習支援隊に「依頼があれば協力する」と

答えた保護者も多かった。自分から進んで申し出るといことは難しいと思われるので、個別に協力をお願いしていくことにする。

(2) 子育て支援セミナーについて

セミナー開催のお知らせは全家庭に配布し、10月に、保護者全員対象に「子育てについて日頃考えていることはありますか」というアンケートを実施し、その結果から、「子どもとのかかわり方10の秘訣」というテーマで開催することになった。

総合教育センターの指導主事、研究員を講師に招いて実施した。子育て支援セミナーは主体が保護者であり、保護者自身が子どもとのかかわりについて考え情報交換し、共に学び合う参加者体験型の研修会で、本校では初めての実践であり、参加者は29名であった。

図4 セミナーの様子



セミナーのまとめとして、講師の先生よりいただいた「子どもとのかかわり方六小八つの秘訣」というリーフレットを全家庭に配布し、活用を図ることにした。

（参加した保護者の感想）

- ・大変勉強になりました。セミナーで一緒に学んだ方とも楽しく育児の悩みを話していくうちに気持ちが楽になりました。困ったときは一人で考えていないで、こうしてみんなで話し合えるといいですね。ありがとうございました。是非また、このようなセミナーを開いていただきたいです。
- ・忙しいということ（という言葉）で片付けてしまいがちな毎日を過ごしている中で、「子育てを知る」という講師の方の言葉にドキッとしてしまいました。同じグループの方の意見に自分の子育てを振り返ることが出来ました。これからも時折振り返りながらも自分らしく子育てをしていきたいと思いました。

V まとめと今後の課題

本研究では、ほっとルームを拠点として地域ネットワーク（心の交流のネットワーク）支援の充実を図るために、現在機能している学校支援隊の枠の中に、学習支援隊を発足させ、学校全体で取り

組んできた。保護者による学習支援隊8名、地域在住の退職教員による学習支援隊1名、合計9名の協力が得られたことは大変よかった。

学習会では、学習支援隊の保護者（お母さん先生）・地域在住の退職教員は、温かい気持ちをもって児童に接したり、児童の目線に合わせて話をしたりしていた。児童の感想にあったように、優しく温かい触れ合いを通して、児童とお母さん先生たちとの心の交流が図れたと言える。また、児童とのかかわりから、お母さん先生は、自分の子どもに対して、一緒に勉強したり、会話が增えたり等のかかわりの変化が見られてきた。

また、教員と学習支援隊の保護者がお互いに協力しながら学習会を行ったことにより、両者の意思疎通が図れ、児童へのよりよい支援となっている。さらに教員間でも児童の情報交換ができ、学級での児童への支援につながっている。

今後は、ほっとルームを拠点とした地域ネットワーク（心の交流ネットワーク）をさらに広げていき、地域と学校が一体となって、児童が安心して学校生活を送れるような支援をしていきたい。そのためには、開かれた学校づくりを行わなければならない。いつでもどんな時でも誰でも、学校を訪れやすい雰囲気にしていくことが大切であると考えている。

子育て支援セミナーでは、子育てに悩んだり不安に感じている保護者が、共に学び合う場として活用できた。参加した保護者の中には、「自分がしっかりしなければと思いました」という感想を寄せ、セミナー後、少し登校渋り気味だった長女に積極的に働きかけた結果、登校渋りがなくなってきた。このセミナーを通して、保護者は子どもとの接し方を見直し、気付くことができたと考えられる。さらにセミナーのまとめとして、リーフレットを各家庭に配布したことは、今後保護者への子育て支援を考える際の指標となったようである。今年度は1回だけのセミナー開催であったので、保護者からの要望にも応え、次年度は回数を増やして、より多くの保護者に参加してもらえるように設定していきたい。

〈主な参考文献〉

- ・『実践ワークブック不登校問題課題解決支援資料』群馬県総合教育センター（2005）

（担当指導主事 武藤 榮一）